



“一丁啮”が行く！

第79回：新幹線開業50周年

あやかし！



東海道新幹線
開業50周年

昭和39年(1964)10月1日、東京-新大阪間にまったく新しい高速鉄道が誕生しました。その名は東海道新幹線。

増え続ける貨客に在来の東海道本線が限界に近づくなかで、東京オリンピックに間に合わせるべく作られたまったく新しい高速旅客鉄道の開業でした。戦前からあった弾丸列車の構想を引き継ぎ、在来線とはまったく異なる思想で作られました。

在来線が線路幅1,067mmの狭軌であるのに対して、1,435mmの標準軌を採用し、すべて立体交差で踏切をなくし、信号機を一切なくして信号を車上で確認できるATC(Automatic Train Control)システムを導入するなど、従来の鉄道の常識をくつがえした日本独自の高速鉄道でした。

ダンゴ鼻で知られる0系新幹線は世界で初めての時速200kmを超える営業運転を行ない、開業時から引退までの44年間活躍しました。また、2階建て新幹線の100系、270km/h運転の“のぞみ”を登場させた300系、300km/hでの営業運転でゲネスブックにも載った500系、カモノハシのくちばしのような700系、そして更に進化したN700系など50年の進化は懐かしくも思えます。

新幹線の開業前に大山崎～水無瀬間の新幹線の線路を約半年間走っていた阪急電車に乗って感激したこと、開業の時、東京駅を出て行く新幹線の生中継のテレビを食い入るように見ていたことなど、知っている人、思い出す人は少なくなってきたかも知れません。

名古屋-大阪間のもとより、東京-名古屋間のリニアモーターカーに乗れるかどうかかわからない年齢だと思いつつ、新幹線50周年をかしめています。



0系



300系



700系



100系



500系



N700系

シリーズ奮戦記

サポートの販売管理システム(㊟シリーズ)は、基本パッケージをベースに、いろいろな業種・業態に合わせてカスタマイズしてご提供する“イージーオーダー型”のソフトウェアです。あらゆる業界で活躍している㊟シリーズの一部をご紹介します。

使っていただいている業種・業態 呉服卸業

ベースとなった㊟シリーズ ごぶく win for ORACLE

導入のポイント

- ・浮貸はもちろんですが、拠点間の在庫移動、催事など商品の移動が多いため、入力が簡単に行えるようにプログラムを対応しました。また、コスト削減のために無線タッチスキャナを利用しております。
- ・催事会場にノートパソコン、プリンターを持ち込みその場で伝票発行を行うようにしております。



カスタマイズと運用のポイント

- ・商品出荷時に数量が多く、従来の入力画面では操作が煩雑になるため、出荷先、出荷商品などの必要最低限の項目のみで入力が行えるようにしました。
- ・外部から、事務所のサーバーにアクセスを行うためにVPNを構築し、プログラム自体はサーバー内で動かし、端末では画面イメージの操作のみを行う方式(ターミナルサービス)を利用することで、回線状況による影響は抑えるようにしました。
- ・VPNによる拠点間のリアルタイム接続

TOPICS

On Your Side
入場無料

中信ビジネスフェア

CHUSHIN BUSINESS FAIR 2014

第26回
大商談会

■地元企業による多彩な展示(先端技術、省エネ・環境、健康、こだわりモノづくり、他)
■産学公連携コーナー
■京の味覚「老舗弁当」コーナー
■創出支援セミナー

■第7回 中信学生デザインコンテスト
■KBS京都「京biz S」特別企画
■海外進出セミナー

平成26年 10月15日(水)・16日(木)
10:00~17:00

京都府総合見本市会館
(京都パルスプラザ) 〒612-8450 京都府京田辺市竹田南引町5
TEL.0775-811-0011

会場へは便利なシャトルタクシーをご利用ください。
運行区間：竹田駅西口～京都パルスプラザ
運行時間：9:00～17:00(随時運行、運賃は無料です)



先月号にはパンフレットも同封させていただきました。是非ともご来場いただき、サポートブースにお立ち寄り下さい。

読者 訪問



第57回

お伺いした会社	株式会社 R I N S A N
お話を伺った方	代表取締役 殿谷 幸司 様
事業内容	建材業（建築資材販売、外装施工、新築、リフォーム）
会社の所在地	〒620-0042 京都府福知山市北本町 28 番地
連絡先など	TEL:0773-22-2541 FAX:0773-23-2226
e-mail	tonoya@rinsans.co.jp

今回は、福知山のRINSAN様（旧社名：福知山林産商会）をお尋ねしました。今年8月に発生した福知山市の大水害で多大な被害を受けられたと聞いておりましたので、一段落された頃を見計らってお見舞い方々訪問しました。今回の水害では殿谷社長が経営しておられる他の2社もあわせて4,000万円ほどの被害を受けられたとか。それをお聞きして驚くと共に適切なねぎらいの言葉もなかったのですが殿谷社長はいたって元気で、水害の話よりは近年の事業拡大のお話を熱く語って下さいました。



水害被害を受けた倉庫

前回、殿谷社長とお会いしたのは5年ほど前。そのときは6名ほどの社員さんでRINSANという会社をやっておられましたが、その後、建築業に進出され、今や株式会社谷英建築、株式会社タニヒデという別会社を二つ、全社員23名を擁する事業規模に拡大されています。



殿谷社長

もともと殿谷社長は木材製材業の3代目としてスタートされ、建築資材を扱う建材業として1~2億円規模で推移してこられました。販売先の大半が工務店であり、弱小工務店からは支払が滞ったり分割払いを要請されたりで、これではいつまで経っても自社の業態がよくなると判断。地元工務店からは反発をかうのを覚悟で建設業に進出。福知山市外を中心に住宅建設などを担う会社を2社立ち上げられました。現在年商は全社で13億程度の規模になったということで急成長されておられます。

株式会社RINSANさんで経営革新の承認をとられてから、殿谷社長の経験談を聞きたいという依頼が全国から多く寄せられ、各地を回って中小企業者の方のお話を聞く機会をたくさん得られました。

そんな中で、今までの自分が井の中のかわずであったことに気付き、もっと社員を信じて社員を育ててみんなが喜べる会社にしたいと決意。小さい会社だからこそできることをやろう、そのためにはスピードが第一と、全社員が朝の5時に出社し、9時までに見積などの社内業務をすべて片付けて9時には全員が外出するという行動パターンを確立されました。お客様から何かリクエストがあれば、明日持って行きますとか、メーカーに聞いて明後日返事しますとかいうようなことはせず、即訪問してお客のリクエストに応える。スピードが命とおっしゃってられます。スピード対応するためには社内業務は電話がかからない早朝にすべて効率よく片付けてしまい、9時から戦闘開始で全員が走り回る。そして、夜は全員が6時には退社して翌日に備える。大手ハウスメーカーに打ち勝つためには、優秀な社員とスピードが命だ。他社と同じことをやっていたらアカン、うちだからできることを徹底してやる。そのためには社員に徹底して問いかけ、社員自らがやりたいという風土を形成。やらされている、やらないかん、と思っているうちはダメ。一人一人が自分事としてやりたい気持ちになることが必要。社員を信頼して社員に育ててもらって今があるとおっしゃいます。社員が悪い会社はダメ、つぶれた会社も一杯みて来た。だから社員を育てて社員と一丸になってこそ今の業績が作れているとおっしゃっています。



最新の建築物件

そもそも、会社が、いや社長が変貌されのは5~6年前のある事件がきっかけだったとか。客先から65万円を集金してきた社員から一本の電話が入りました。「集金してきたお金を落としてしまった！」と。会社に帰ってきてしょんぼりしている社員に殿谷社長はポケットマネーから黙って65万円の現金を渡し、「落としたと思ったけど出てきたとみんなに言っておけ」と。疑いもせず責めもせず、黙って出してくれた社長の姿にその社員さんは大感激し、その後、社業に邁進してメキメキと頭角を現します。そして「ボクは死んだら社長と一緒にのお墓に入りたい」「子供ができればRINSANで働かせたい」と公言するようになりました。それを見ていた社長、今まで何度も社員に裏切られたこともあったけど、ひたすら信じてきたことが社員を成長させることにつながった。社員のお陰で自分が変わることができた。社長が変わったら社員も変わってきた。そして、会社も変わったという好循環を実践されました。



外壁の施工中

社員の成長は会社発展の原動力と、身内中心で同族経営をしていた時には考えられなかった経理公開をはじめ、決算賞与支給や能力成果主義を導入し、全員総力で社業に邁進しておられます。

今回の水害被害、5~6年前なら社員をクビにして事業縮小し、場合によっては事業を辞めてたかも知れないとおっしゃいます。しかし今は、借入もせず行政からの大きな支援も受けず、すべて自社資金で賄うことができる。これも社員のお陰だとおっしゃいます。

お話を聞きしている間、何十回と、社員が…、社員のお陰で…、という言葉が出てきました。

帰りがけ、「社長いつまでも古いクルマに乗ってないで！」といって、社員がお金を出し合って買ってくれたというアウディを嬉しそうな顔をして見せてもらって帰路につきました。

すばらしいお話をお聞きすることができた感激と、自らを叱咤激励する興奮を抱きながら、そしてまた数年後、是非お話を聞きたいと思いながら、夜のとぼりが降りた京都縦貫道を走っていました。